

フロイトとユングの分岐における 〈人類の先史としての子ども〉

—精神分析と起源を求める視線—

教育学コース 下 司 晶

'Childhood as Prehistory of the Human' in the Freud - Jung Controversies:
Some Psychoanalytic Views of the Past

Akira GESHI

In this article, the author attempts to clarify "childhood as the prehistory of human" in the dispute of Freud and Jung, which was a part of the "psychoanalytic child", but which forms no part of today's child or childhood.

Why did Freud emphasize "sex"? The answer according to the author for this question is because he based his theory on the biogenetic law of E. Haeckel and W. Boelche. Both Freud and Jung relied upon the recapitulation theory of Haeckel and applied it in their psychological ideas. Therefore, for them, "the prehistory of human" was identified with "childhood".

However, a different attitude towards biology caused Freud and Jung's theories to diverge. For Freud, some (traumatic) experience not only in individual infancy but also in the prehistory of human had etiological significance in reality. But for Jung, neither the individual infancy nor the prehistory of human had any value outside of fantasy.

Post Freud, psychoanalysis has shifted to focus to understanding the child itself. Arguably, this paper concludes that, on the one hand, this change of focus shows that our understanding of the child has progressed, but on the other hand, compared with Freud, it removes some of the building blocks upon which we base our experiences with child or of childhood.

目 次

はじめに	—フロイト／ユングから「心理学者」のヴェールを剥ぐこと
第一章	〈人類の先史としての子ども〉 —フロイト／ユングの生物学的背景
第二章	リビドー論の争点としての幼児期 —固着と退行
第三章	個と類の先史に〈起源〉を問う視線
結語に代えて	—〈精神分析的子ども〉の変容

はじめに —フロイト／ユングから「心理学者」のヴェールを剥ぐこと

本論は、S・フロイト (Freud, Sigmund 1856-1939) の思想における「子ども」および「子ども期」の位置を明らかにするものである。特にその性質を明確にするため、ユング (Jung, Carl Gustav 1875-1961) との理論的分岐を焦点化する。この課題はしかし、リビドーの発達と元型発現の時期とを大まかな発達段階に位置づけて対比することで達成されるものではない。確かに、今日のわが国の子ども理解には、フロイトやユングが端緒となった深層心理学的な視点が大きな役割を果たしているといわれる。しかし、彼らの思想を当時のコ

ンテキストに置き直してみると、私たちのイメージするそれとは大きくずれるのではないだろうか。したがってここに、私たちがS・フロイトやユングから受け継いだとみなしている「子ども」観と、彼ら自身におけるそれらの間の、質的な変容もしくは断絶を解明する必要が生じる。そのためには、フロイトやユングを先駆的「心理学者」としてではなく、一己の思想家として理解することが求められよう。こうした前提に立ってこそ、現代の心理学的な思考法が暗黙に前提としている知の配置を問い直すことが可能になるのではないか。

では、精神分析に特有な子ども観とはいかなるものだろうか。西平直は、そのエリクソン研究において、「大人が自分とは異なるものとして子どもをみる、という時の大人と区別される子ども」と「大人もかつては子どもであったという時の、いわば大人の中の子ども」を便宜的に区分し、前者を「子ども (child)」, 後者を「子どもであること・幼児期 (childhood)」と呼んでいる。そして、「childhood の、第一の意味は、自分自身の生育史的過去、同時に今もなお意味を持ち続ける幼児期の体験」であり、「大人自身の内なる幼児期への関係」こそ「ごく図式的にみれば、精神分析理論の子ども理解を、発達心理学の子ども理解から区別する第一の点である」という(西平1993: 99-100)。

ここで、西平ののべるような「子ども (child)」と「子どもであること・幼児期 (childhood)」が重層的に絡み合った、精神分析の影響を受けた子ども観を呼び示すために、それを〈精神分析的子ども (psychoanalytisches Kind, psychoanalytic child)〉と仮に名づけてみよう。この端緒はむしろS・フロイトに求められるが、その全てが今日に受け継がれたわけではない。いいかえれば〈精神分析的子ども〉は、フロイトの時代以降、ある変容を被っていると考えられる。そこで、フロイト／ユングには見いだせるにもかかわらず、私たちを含む後の世代には受け継がれなかった〈精神分析的子ども〉のある側面を言いあらわすため、それを——彼らがそうした言葉を用いているわけではないが——〈人類の先史としての子ども (Kindheit als Prahistorie der Menschheit, childhood as prehistory of human)〉と仮に呼んでおきたい¹⁾。

本論の目的は、〈人類の先史としての子ども〉を明らかにすることであり、それによって私たちとフロイトとの距離を測定することである。そのために、フロイトとユングの分岐に関して一般によく知られた論述に潜む問題から論をはじめたい。

第一章 〈人類の先史としての子ども〉 —フロイト／ユングの生物学的背景

1. 性と進化生物学

フロイトとユングの理論的決裂において、最も重要な役割を果たしたのは、「性」の問題だったといわれる。これを端的に示すのが、ユングの自伝的著作の一節である。

「今でも私は、フロイトが『親愛なるユング、決して性理論 (Sexualtheorie) を棄てないと私に約束してください。それは一番本質的なこと (das Allerwesentlichste) なのです。私たちはそれについての教義を、ゆるぎない砦を作らなければならないのです。ね、そうでしょう』と言ったあの時の有様を生き生きと思い出すことができる。[...] いささか驚いて、私は彼に聞き返した。『砦って、いったい何に対しての?』 それに対して彼は答えた。『世間のつまらぬ風潮に対して』——ここで彼はしばらくためらい、そしてつけ加えた。——『オカルト主義のです』」(ETG 154-55; MDR 150; 自伝 1: 217)。

この箇所は通常、フロイトが「性」に過度にとらわれていた例を示すものとして理解されている。しかし、なぜ「性理論」が「オカルト主義」に対する「ゆるぎない砦」になるのだろうか。これを理解するためには、フロイトとその時代における「性」の含意が明らかにされねばならない。

この手がかりになるのが、精神分析は「性」の重視によって批判の集中砲火を浴びたという通説を問い直しているエレンベルガーの説である。「現今のお定まりの説は、『フロイトの発見は、当時の“ヴィクトリア王朝風”の偏見と神経症的抑圧という観点からしてフロイトの性概念を受容しえなかった人々からの火を噴くような狂信的な抵抗に遭遇した』というものである。しかし事実を客観的に調べてみると、実際の状況は全くそれと違ったものであったことが示される」(Ellenberger 1970: 814 = 1980b: 467)。そしてエレンベルガーは、1912年のチューリッヒにおける精神分析をめぐる論争を取り上げ、精神分析が批判された理由の一つに、「精神分析が一般には唯物論哲学やヘッケル的一元論と同一視されたこと」をあげる。「精神分析に対する批判はある程度まで、ヘッケルとその一元論者連盟に対しての、つねの批判の一部だった」

(Ellenberger 1970: 815=1980b: 468)。

以上の指摘からは、フロイトと精神分析における「性」が、ヘッケル(Haeckel, Ernst Heinrich 1834-1919)の生物学理論と深く関連していたこと、さらにその連関が同時代では明確に意識されていたことが理解できる。また現代の進化生物学者、スティーヴン・J・グールド(Gould, Stephen Jay)は、「フロイト派精神分析」が、いかに深くE・ヘッケルの反復説の影響下にあったかを論じている(Gould 1977: 155-64=1987: 231-43)。またフロイト自身も、1914年の「ナルシシズム入門」において、リビドー理論が生物学に依拠していることを明記している。「リビドー理論は、すくなくとも心理学的な基礎のうえに立ってはいるが、根本的には生物学によって支えられている」(G.W.10: 146; S.E.14: 79; 著5: 114)。

そこで本論では、精神分析の基盤としての生物学の役割に注目することとする。この作業によって、「心理学理論」としてフロイトやユングに着目する立場からは盲点となっているある側面が明らかになるだろう²⁾。

2. 個体発生は系統発生を繰り返す

ヘッケルが、個体としての人間の成長発達を「個体発生」と、類としての人の進化史を「系統発生」と呼び、個体発生がその初期において系統発生において辿ってきた道程を反復する、と主張したことは周知の通りである。

「個体発生(Ontogenesis)は系統発生(Phylogenesis)の短縮された急速な反復である。この反復は、遺伝(生殖)および適応(食餌)の生理的機能により規定されている」(Haeckel 1866: 300)。

フロイトは初期の『夢判断』(1900)において、個の過去たる子ども期と、人類の進化史とを重ね合わせる系統発生的思考の片鱗を見せていた。「夢は、原始的な(*primären*)、むだだとわかって棄てられてしまった心的装置の活動様式の標本(Probe)を、われわれのために保存しておいてくれたものに他ならない。[...]『夢を見る』ということは、今や克服されてしまった子どもの心の営みの一部なのである」(G.W.3: 371-72; S.E.5: 567; 著2: 465-66)。

だが、フロイトが反復説を明確に論じ出すのは、1906年にユングとの邂逅を果たし、間もなく始まった頻繁な交流以降のことと考えられる。フロイトは1910年には、反復説を心理学に応用し、「重要な生物学的

^{アナロジー}類似によって、われわれは、個々人の心的発展は人類発展の道程を短縮して繰り返すという意見を是とする用意ができています」と明確にのべている(「レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期のある思い出」G.W.8: 167; S.E.10: 97; 著3: 116)。そもそも「個々人の幼児期と民族の先史時代との比較」という「文化史的関心(das kulturhistorische Interesse)」をフロイトにもたらしたのは、他ならぬユングだったのである。アブラハム(Abraham)、シュピールライン(Spielrein)とともにユングの名を注記しながら、フロイトは1913年に次のようにのべる(「精神分析への関心」)。

「ごく最近の数年の間に精神分析的研究は、『個体発生は系統発生を反復する』という命題が精神生活にも応用できるに違いないことを思い出し、そこから精神分析的関心の新たな拡大が起こったのである」(G.W.8: 413; S.E.13: 184; 著10: 234)。

ユングは1911年の「リビドーの変容と象徴」(第一部)で、個体発生は系統発生を繰り返すというヘッケルのテーゼが、心理学においても妥当するとのべている。

「比較解剖学や発達史(Entwicklungsgeschichte)においてよく知られているように、人体の構造や機能は、種の発生史の歴史(Stammesgeschichte)における変化に対応する、一連の胎生的変化を経て発生することを示している。それゆえ、心理学においても、個体発生は系統発生に符合するという推測は正当化される。であるならば同様に、夢だけでなく、子どもの精神生活における幼児的な思考状態も、先史時代や古代の反復に他ならないということも、事実であろう」(Jung 1991[1912]: 37)。

ここで私たちが注目せねばならないのは、生後の子どもも、特に幼いうちは、未だ完成体への発達途上にあるという意味で、種の歴史の反復中であるとされる点である。精神分析において、夢・神経症・子ども・原始人が、大人に対する陰画(ネガ)として併置されることはよく知られているが、こうした思想は、反復論を前提としている。

フロイトの『夢判断』(1900)に、1919年に加えられた追記では、以前には示唆に留まっていた個人の子どもの期と類の発達史との連関が、非常に明確になっている。

「個人的な幼年期の背後には、系統発生的な幼年

期(die phylogenetische Kindheit), つまり人類の発展(Entwicklung des Menschengeschlechts)が顔をのぞかせている。個々人の幼年期は、偶然の生活諸事情によって影響された、人類の幼年期の短縮された反復に他ならないのである」(G.W.3: 554; S.E.5: 548; 著2: 451)。

こうした言説に見られるように、反復説を基礎として、種としての人類の過去と等値される「子ども」を、本論では〈人類の先史としての子ども〉と名づけておきたい。

3. 獲得形質の遺伝

では、反復説が、フロイトやユングにとって共有の基盤だったとして、彼らの分岐点とは何だったのか。この問題に答える前に、両者にとっての生物学の位置をもう少し論ぜねばならない。

先に触れたグールドは、「初めのうちはフロイトを支持し、のちにライバルとなった人たちは、反復説に対するフロイトの基本的な信念を承認したが、その適用法で異なっていた」として、その例にユングをあげている(Gould 1977: 161=1987: 239)。また、グールドにも影響を与えた科学史家フランク・J・サロウェイ(Sulloway, Frank J.)は、この点を先駆的に示している。すなわち「フロイトの最も創造的な門弟たちは、フロイトと同じように、彼らの研究の中で生物学的仮説を自由に描いていた」のだが、エディプス・コンプレックスの公式に関して「不和がより明確になればなるほど、その根底をなす源泉である生物学的見解の相違も、より明らかになってきた」のである(Sulloway 1992[1979]: 427-28)。ここで私たちがグールドおよびサロウェイの説を敷衍するならば、フロイトとユングの理論的分岐を、彼らの依拠した生物学理論の相違から——あるいは少なくとも、それを含むものとして——描きだすことも可能であろう。

フロイトとユングには、確かに反復説という共通の基盤があった。しかしここで、フロイトは反復論者だけでなく、「獲得形質の遺伝」——いわゆるラマルキズム³⁾——の支持者だったことに注目したい。アーネスト・ジョーンズ(Jones, Ernest 1879-1958)が「フロイトの生涯」でのべたように、フロイトは獲得形質の遺伝説が否定されたことを知ってなお「何らかの理由でそれを無視することを選んだ」(Jones 1957: 312)。最晩年の著作「人間モーセと一神教」(1939)でも、フロイトは、生物学ではすでに否定されたこの学説を支持

している。

「私たちの状況は、子孫への獲得形質の遺伝(der Vererbung erworbener Eigenschaften)を認めない、生物学の現在の見解によって困難になっている。しかし、生物学のそのような立場にもかかわらず、これらの要因は、生物の発展において欠くべからざるものであると、私たちは非常に謙虚に告白しよう」(G.W.16: 207; S.E.23: 100; 著10: 347-48)。

それに対し、ユングは反復説は積極的に認めたが、「獲得形質の遺伝」は支持しなかった。したがって、本論で明らかにしていくように、この学説が、両者の理論を分岐させる一因と考えることも出来る。

さらに、ユングにとって生物学とは、ロマン主義的な自然哲学の色彩を帯びたものだった。ユングは、医学部入学以前、歴史や哲学を選ぶか自然科学を学ぶか思い悩んでいた学生時代に見た二つの夢が、自分を自然科学者たる医師の道へと進ませたという。その一つは、ライン川沿いの森の中の丘で、先史時代の動物の骨を掘り当てた夢。もう一つは、水路の薄暗い箇所では半ば水につかった、直径1メートルに及ぶ巨大な放散虫(Riesenradiolarie)の夢である。「これら二つの夢が私を圧倒的に科学の方に決めさせ、あらゆる疑念をぬぐい去った」(ETG 89-90; MDR 54-85; 自伝1: 130-31)。

ここで登場する放散虫とはヘッケルが描いた海に生息する微生物であるが、ユング研究者のR・ノル(Noll, Richard)は、その取り扱い方にこそ、ユングの学問的態度を端的に示しているという。

「放散虫を裸眼ではっきりと見るなどできない。ユングの夢に出てくるような、巨大化した聖なる怪物のごとき、三フィートの放散虫などないのだ。何でもない自然現象を壮大な、この世のものとも思われぬ光景に膨らませるのが、ユング流の描き方である。彼がヘッケルの『生物遺伝学法則』を、文化の進化段階や人間の意識の進化に応用したやり方は、そのもうひとつの好例といえよう」(Noll 1997: 105=1999: 171)。

では、フロイトとユングの生物学的背景の差は、両者の〈子ども〉像にどのように反映されるのだろうか。

第二章 リビドー論の争点としての幼児期 —固着と退行

1. ユングによるリビドー論の刷新 —「退行」と幼児期経験の軽視

ユングが、リビドー論の刷新——フロイトとの理論的分岐——を公表しはじめるのは、1912年秋、アメリカで行った講演「精神分析理論概観」と、渡米中に出版された「リビドーの変容と象徴——思考の発達史に寄せて」(Jung 1991[1912])⁴⁾の第二部である。この両論文でユングはフロイトのリビドー論を疑問視し、それを拡張しようと試みる。

ユングはまず、「リビドーの変容と象徴」の第一部(1911)で、現代人や成人の「適応的思考」と、神話と子どもの「空想的思考」を区別し、後者は「私たち個々人の過去(individuellen Vergangenheit)にも、人類の過去(der Vergangenheit der Menschheit)にも存在する」という(Jung 1991: 43)。このように個人の過去と人類の過去を対比させ、「古代の空想的-神話的思考とそれと似た子どもの思考との、あるいは未開人の思考と夢の思考との平行関係」(Jung 1991: 37)を示す点では、ユングとフロイトは類似している印象を受ける。

確かに、「リビドーの変容と象徴」は、アメリカ人女性フランク・ミラーの空想的著作の分析という形をとっている(Jung 1991: 47)。しかし、読者はすぐに、ユングの分析手法がフロイト流のそれから大きく逸脱していることを理解するだろう。ユングの意図は、その空想をミラーの生活史に位置づけて分析することではなく、その空想に類似した象徴を、世界各地の幅広い年代の神話の中に見いだすことなのである。そして「二種類の思考」という表現から明らかなように、ユングはこれらの二つの思考法に価値の序列を設けない。「私たちはまた、これらの空想的思考は、現代人や大人においても(bei uns modernen und erwachsenen Menschen)、方向付けられた思考(das gerichtete Denken)が停止すると、すぐに広い場所を要求し姿を現すことを知っている」(Jung 1991: 39)。すなわち、私たち現代人や成人にも、古代の「空想的思考」が、今なお息づいていることを主張するのである。

ユングはその上で、同論文の第二部において、リビドー概念の拡張を宣言する。「リビドー概念の歴史は、主としてフロイトの『性理論三篇』に端を発する。ここでは(リビドー)という語は、性的欲動(Sexualtriebes)、性的願望(des Sexualbegehrens)という元来の(医学的)意味でのみ用いられている」。それに対してユングは、

「『性理論三篇』が刊行された1905年以降、リビドー概念の適用には変容(Wandlung)が起こり、その適用範囲が拡大されている。そのような拡大(Erweiterung)の好例が本論である」とのべ、リビドー概念を、狭義の「性的な意味から解き放つ(1991: 133-34)。つまりタイトルにある「リビドーの変容」とは、個体発生および系統発生におけるその変容(Wandlung)と、ユング自らによるリビドー論の新展開の二重の意味が含まれていると考えられる。

そしてこのリビドー論の刷新は、病因論における幼児期の位置の変更にも直結する。これがより明確に表明されているのが、精神分析理論の普及のためアメリカはフォーダム大学で1912年に行った講演、「精神分析理論概観」(1913)である。そこでユングは、上に触れたリビドー論の刷新を繰り返しながら、フロイト流の心的決定論を正面から問い直す。

「精神分析学派の大部分はいまだに、幼児期の性(die Sexualität der Kindheit)が神経症の必須条件(conditio sine qua non)であるという見解の呪縛下にある。理論家は科学的な関心から児童期を調べ、実践家も同様に考えて、神経症を引き起こす空想を探すために、幼児期の先史(die infantile Vorgeschichte)をひっくり返さねばならないと信じている。なんと空しく無益な企て! そうこうしている間に、重要なもの、すなわち現時点の葛藤とその要求は分析家から逃げてしまう」(Jung 1913, G.W.4: 192; C.W.4: 166)。

ユングによれば、過去の心的外傷を表すかに見える空想も、実際には個人の生活史に位置づけられるものではない。その空想は、現在の葛藤状況の反映にすぎないのである。「病因的な葛藤の原因は、主に現在にあるのだ」(Jung 1913, G.W.4: 192; C.W.4: 166)。

ここで重要な役割を果たすのが「退行」概念である。「リビドーの退行(Regression)についての洞察は、幼児期経験の病因的重要性を、かなりの規模で廃止する」(Jung 1913, G.W.4: 194; C.W.4: 168)。「退行」においては人は、現代の、方向付けられた思考を離れ、古代と子どもに一般的にみられる空想的思考法を示す。したがって退行状態での空想(幻想)は、過去の心的外傷の記憶とはいえないのである。

2. 病因としての幼児期における固着

しかし、フロイトにおいてはリビドーの性的意味の

希釈と、幼児期の意義の軽視は、決して許容できるものではなかった。ユングへの反論としての幼児期経験の重要性という観点をもっとも明確にあらわれるのは、症例「狼男」(「ある幼児期神経症の病歴より」)である。第一次世界大戦にともなう出版事情により1918年まで刊行が延期された「この病歴は、1914年から1915年にかけての冬、本患者の分析治療が完了した直後に、C・G・ユングとA・アドラーが精神分析学の収穫の内に加えようとしていた誤った新解釈から与えられた、当時の新鮮な衝撃を刺激として書かれたものである」(G.W.12: 29; S.E.17: 7; 著9: 348)。フロイトの目的は明らかだ。ユングが主張した「神経症を徹底的に分析することによって明らかにされる早期幼児期の諸状況は、[...]退行的傾向や現在課せられている課題を回避することによって生み出された空想形成物なのである、という見解」を、外傷となった光景の〈現実性〉を証明することで反駁することである(G.W.12: 77-78; S.E.7: 49; 著9: 387.)。

「幼児期体験の影響は、人生の現実的な諸問題を克服していく道程において、その個体が拒否反応を起こすかどうか、起こすとすればどのような箇所で行き止むことになるかを決定的に規定するものである。

したがって幼児期体験という要因の重要性如何こそ、この論争の焦点である」(G.W.12: 83; S.E.7: 54; 著9: 392)。

フロイトは、「狼男」の報告にあらわれる数々の誘惑空想の(現実性/幻想性)を判定し、それぞれの時期を特定しつつ過去に切り込む。そして、彼の症状を特徴づける「一つの夢(不安夢)」の期日を四歳の誕生日の前と位置づけ、この夢の背後に、それ以前にあったはずの原光景(Urszene)を想定する。「原光景の影響が四、五歳であられる場合には、幼児はこの光景をそれよりももっと以前の年齢の時期に目撃したに違いない」(G.W.12: 85; S.E.7: 56; 著9: 394)。フロイトは、外傷となった契機——この場合、両親の性交の光景を含むとされた——を、必ずその個体が経験したものであると理解した。「その原光景が、この幼児によって体験された現実の再生と全く別な何ものであるとは、その原光景の内容を省みても、とても考えられない」(G.W.12: 83; S.E.17: 55; 著9: 393)。

3. 精神分析の基礎としての生物発生法則

では、フロイトはなぜ、このように「性」と「児童期」を重視するのだろうか。この理由は、「固着」という観点から明らかになる。フロイトは後に、ユングとの論争を意識しつつ「私は、性的欲動のエネルギーを——ただこれのみをリビドーと名づけた」と前置きしながら、自説を簡潔に整理している(「自己を語る」1925)。

「個々の成分がつよすぎる結果として、あるいはあまり早期に欲求が満足されるという体験の結果として発達の上におけるリビドーの固着(Fixierungen der Libido)が起こるといえることがある。そして、抑圧をうけたときにその場所へと向かってリビドーはもどってゆくのである(退行Regression)。そして、ここから症状への炸裂(Durchbruch)が起こる。その後の洞察によって、この固着の部位には、いかなる型の神経症をえらぶかという神経症選択の問題にたいしても決定的な意味をもつことがつけ加えられたのである」(G.W.14: 61; S.E.20: 35-36; 著4: 446)。

ここで「固着」は、神経症の病因的意義をもつのみならず、その病の形態を決定するという役割を果たしている。しかし私たちはここで、リビドーの「固着」という観点が、そもそも反復説を基礎として成立している点を確認しておかねばならない。

『精神分析入門』(1916-17)における以下の記述からは、フロイトがヘッケルの反復説、そしてその喧伝者であるベルシェ(Bölsche, Wilhelm)の説を基礎としてリビドーの発達を構想していることが理解できる。ベルシェは、ダーウィンやヘッケルの伝記や、ヘッケル理論を基礎とした著作によって、ドイツ語圏に進化論を広めた立役者である。1914年までに売れたベルシェの全著作の総計は150万部。これはヘッケルの三倍にも及ぶという(八杉 1994: 119)。

「自我の発達とリビドーの発達 [...] この両者は根本において、人類全体の非常に長い年代をへた、その原始時代からの発達の遺産であり、短縮された形でのその反復なのです。リビドーの発達にはこの系統発生的な由来がたやすくみられると私は考えたいのです。ある種の動物では、性器と口とは密接な関連をもっており、また他の種の動物では、性器が排泄器官と分離していませんし、さらに別の種属では、性器が運動器官と結びつけら

れているということを考えてみてください。このようなことについては、W・ベルシェのすぐれた著書の中に、興味深い記述がなされています」(G.W.11: 368; S.E.16: 354; 著2: 292-93)。

ベルシェの性発達理論は、^{ヴァーグストレーア}ヘッケルの原始腸祖生物論を基礎としている。ヘッケルは1870年代初頭、多細胞生物が発生学的発達の最初期段階において、共通のパターンに従うと考え、その基底となる原始生物を考案した。これは個体としての受精卵の発達過程と同様の段階が、類の進化の初期段階にも存在したとの仮定に基づく、空想上の生物である。ヘッケルは、受精した接合体は原始的な胃、口、そして後に肛門開口部をつくるために陥入すると主張した。ベルシェは、この理論を援用し、発生の順序を、(1) 消化器でもある口、(2) 原始排泄腔、(3) 肛門、(4) 生殖器と考えた。この機序は、個体のみならず種としての生物の発生にも対応している。そしてこの生物発生法則が、ほぼそのまま口唇期、肛門期、性器期というフロイトのリビドー発達理論に受け継がれている(Sulloway 1992: 260ff.)。

フロイトが、発達段階説の古典である口唇期-肛門期(-性器期)という段階を仮定したのは、『性理論三篇』(1905)といわれるが、正確には同書への1915年の追記項目、「性的体制の発達段階」においてである。「性器領域がまだ有力な役割を果たすまでになっていない性生活の体制を、私たちは前性器的(*prägenitale*)とよぶことにしよう」。「このような前性器的性体制の第一段階は、口唇愛的もしくは食人的な体制である」。「第二の前性器的段階はサディズム的・肛門愛的体制である」(G.W.5: 98-99; S.E.7: 198-89; 著5: 57-59)。つまり「固着」は、反復説による生物発生原則を基礎として考案された、ある人間の発生が阻害された地点を確定するための概念なのである。

サロウェイが示しているように、精神分析の勃興期には、ダーウィンに端を発する進化論の広汎な影響と受容によって、生物としての人間存在の探求がさまざまな分野でなされており、さらにそうした領域においては「性」が特別な位置を占めていた(Sulloway 1992: 252ff., 277ff.)。その意味でフロイトも時代の申し子といえるのである。フロイトが依拠したベルシェ自身、「性」という観点から子どもの発達を素描しようと試みていた。サロウェイは、「フロイトに残された課題は、ベルシェが簡単に描いた子どもの発達に、性的な内容を補完することだった」とのべているが(Sulloway

1992: 263)、ヘッケル-ベルシェの生物発生法則は、もともと生殖という意味合いを帯びたものであったのだから、反復説を支持するフロイトにとっては、性が人間の子ども期にも見いだせることは、当然のことだったと考えられる。

第三章 個と類の先史に〈起源〉を問う視線

1. 幼児期体験を超えるもの —獲得形質の遺伝

ユングの離反直後、1914-15年に執筆された症例「狼男」にて、フロイトは原光景の〈現実性〉を主張したことをすでに私たちは確認した。そこでは個人の過去に病因となる事件的な契機が求められるはずだった。にもかかわらず、1918年の出版時の追記では、原光景の〈現実性〉に対する態度はアンビヴァレントなものとなっている。「われわれは今まで考えていた契機だけではなく、むしろ他の別の契機を考えることもできるし、それでもかまわないのかもしれない。すなわちそれは、両親の性交ではなく、むしろ動物の性交だったかもしれないのである」(G.W.12: 87; S.E.7: 58; 著9: 395)。

「狼男」が、ユングらに対して幼児期体験の重要性を主張するために書かれたという経緯を考えれば、この譲歩は、私たちにとっては意外なものに思われる。だが、それに続くフロイトの告白は、さらに衝撃的なものだ。「告白しよう——実は私は原光景の現実的意義に関する討論を今回は証拠不十分と判断して打ち切るつもりなのだ」(G.W.12: 90; S.E.7: 60; 著9: 398)。しかし、フロイトが、病因として外傷的経験の確固たる〈現実性〉を主張できないとすれば、ユングへの反駁は困難になるのではないか——このような読者の問を想定してフロイトはのべる。

「まず私自身、この患者の場合、原光景が果して空想(*Phantasie*)だったのか、それとも実在した体験(*reales Erlebnis*)だったのかを知りたいのである。ところが、われわれは、他の同じような症例の考察を基にして、そのような試み、そのいずれであるかを決定する試みは、本質的にあまり意味のあることではないということが出来る」(G.W.12: 131; S.E.7: 97; 著9: 432)。

だが、なぜ幼児期体験の〈現実性/幻想性〉を確定する試みが意味のないことなのだろうか。ここでフロイトは、原光景、すなわち「両親の性交の目撃、幼児期における性的誘惑、去勢威嚇などの光景は、明らかに

遺伝されたもの、系統発生的に受け継がれた遺伝であると同時に、個人的な体験からも獲得されたものである」という(G.W.12: 131; S.E.7: 97; 著9: 432)。つまり、病因的契機は、個人の経験であると同時に、遺伝されたものでもあるというのだ。「結局私は、かつて太古の時代に獲得され、各個体に遺伝されて、素質として再現されるような普遍的な条件が、各個体に器質的に保持されているという事実を少しも疑うものではないのである」(G.W.12: 131; S.E.7: 97; 著9: 432)。

このような論点の変更はしかし、フロイトにおいては、幼児期経験の軽視にはつながらない。探求の線が、必ずしも個体の経験にのみ閉じていたわけではないにせよ、フロイトはまずは個人の生活史に病因となった契機を求める。その上で、個の経験範囲を超えるにもかかわらず、その個体に見いだせるものは、当該の類の過去において獲得されたものだ、とフロイトは考えたのである。

「系統発生的な遺伝を認める点で私はユングと完全に意見が一致している。しかし私は、まだ個体発生からの説明の可能性がつかないうちに、系統発生からの説明を試みようとするのは、方法論的に正しいことだと思わない」(G.W.12: 131; S.E.7: 97; 著9: 432)。

この〈起源〉を求める姿勢の差——個人の過去たる幼児期と、人類の幼児期たる先史時代に——こそ、フロイトとユングの分岐に重要な役割を果たしているのである。

2. 幼児期と人類の先史における〈現実性／幻想性〉

フロイトとユングの間に齟齬が生じ始めるのは、1911年8月20日、ユングの「リビドーの変容と象徴」第一部が掲載された『精神分析-精神病理学研究年報』が完成した頃である。そして1912年秋に第二部が発表された『リビドーの変容と象徴』(1912)と、1912-13年に書かれたフロイトの『トーテムとタブー』(1913)は、彼らの理論的分岐の記念碑となった。これらの二論文は、ともに単なる心理学理論の体裁をはるかに超え、反復説を基礎として人類の文化発展史を論じようとするものである。つまり、リビドー論の相違と現代では理解されている彼らの分岐は、幼児期における外傷経験だけでなく、人類の先史において近親姦禁止を引き起こした出来事の〈現実性／幻想性〉においても対立していたのである。

ユングは1911年10月17日、「非常に早期の記憶」、「いわゆる『早期幼児期記憶(fürhen Kindheitserinnerungen)』」が、個体の記憶ではまったくなく、系統発生的記憶であるとの推測が、他に出てくる確かな観察と一致する」とのべていた(275J, Brief. 496-97; Letters 450; 書簡下 220)。ここで着目すべきは、個体の「早期幼児記憶」は、「系統発生的記憶」だからこそ〈現実性〉の判断からまぬがれるとユングが考えている点である。

すでにみてきたように、ユングによれば、古代の思考法は現代人の思考法と異なり、現実的な対象には向かわない。したがって「退行」状態においてあらわれる空想は、太古の、そして子どもの思考様式によるものであり、過去に現実にあった経験の反映とはいえない。そしてこの観点はそのまま人類の先史時代における近親姦禁止という出来事の内容にも該当する。

1912年4月27日、「トーテムとタブー」(第一部)が掲載された『イマーゴ』誌を受け取ったユングは、返礼においてフロイトに反論を試みている。「あなたと同様わたしも近親姦問題と徹底的に対決いたしまして、近親姦を根本的には空想上の問題と思わせる結論に達しました。[...] 神話がしめしている母親の巨大な役割は、生物学的近親姦問題をはるかに上回る意義、換言すれば空想として(phantasich)存在するしかない意義をもつものです」(312J, Brief. 556; Letters 502; 書簡下 291)。

そして、個体の幼児期と類の歴史に病因的契機を位置づけるという頸木から解き放たれたユングは、翌1912年5月17日に「一つの性的外傷がほんとうに生じているかどうか、あるいはたんなる空想にすぎなかったかどうかは、どう控え目に見積っても筋違いなのと同様に、[人類の歴史において]近親姦の禁止がほんとうに実在したかしなかったかは、[...]まったく取るに足らない問題」だとさえのべる(315J, Brief. 560; Letters 506; 書簡下 296)。

ユングにおいては、人類の過去と子ども期は、漸進的に「現在」を作り上げてきたものではなく、現代人の中で噴出する機を窺いつつ潜在しているマグマのようなものだったのである。

3. 〈起源〉を求めて——人類の先史における原父殺害

ユングに比してフロイトには、〈起源〉を問う姿勢がある。彼は、個人の過去においても、また人類の歴史においても、現在を生み出した原因として、何らかの〈現実的〉契機を求めるのである。この探求が人類の先史にまで及んだのが、『トーテムとタブー』である。

そこでフロイトは「近親姦禁止 (Inzestscheu) の発生を説明する」自らの「試み」を「歴史的由来説 (eine historische Ableitung)」と呼んでいる (G.W.9: 152; S.E.13: 125; 著3: 252)。

フロイトによれば、人類の先史における一つの謎、近親姦の禁止とトーテミズムの発生との連関を歴史的に推察しようとする「この試みは、人間の社会的原始状態に関する Ch・ダーウィンの仮説に関連するものである。ダーウィンは高等猿類の生活習慣から推定して、人間もまたはじめは小さな群れ (kleineren Horden) をなして生活し、最年長にして最強の男性の嫉妬によって、その群れの中での乱交 (die sexuelle Promiskuität) が禁止されたと考えたのである」(G.W.9: 152-53; S.E.13: 125; 著3: 252)。

では、トーテミズムと族外婚はどのように関連するのだろうか。フロイトによれば、これまでのところ、十分な説明を与えたものはいない。「ダーウィンの原始群説 (die Darwinsche Urhorde) には、むしろトーテミズムの発端を説明するだけの余裕はない」(G.W.9: 171; S.E.13: 141; 著3: 265)。

しかしフロイトは、自信を持ってのべる。「この暗黒にただ一条の光を投ずるものは精神分析的経験のみである」(G.W.9: 154; S.E.13: 126; 著3: 253)。そして、特にそのための手がかりとなるのが、子どもの精神分析的研究だった。「トーテムとタブー」には、「未開人と神経症者との精神生活における若干の一致点について」との副題が付されているが、フロイトにとっては「未開人」と「神経症者」の媒介となり、近親姦禁止とトーテミズムの起源に新たな理解をもたらすのは「子ども」に他ならなかったのである

フロイトは、「少年ハンス」と、アブラハムの「小さなアルパート (der kleine Arpad)」の症例から、少年の動物恐怖症は、父親コンプレックスの反復に他ならないという (G.W.9: 157-58; S.E.13: 129-30; 著3: 255-56)。さらに彼は、未開人がトーテムを彼らの「祖先 (Ahnern)」または「原父 (Urvater)」と呼ぶことに着目する (G.W.9: 159-60; S.E.13: 131; 著3: 257)。この洞察によって、「トーテム制度は、『少年ハンス』の動物恐怖症や『小さなアルパート』の鳥類倒錯と同じく、エディプス・コンプレックスの条件 (den Bedingungen des Ödipus-Komplexes) から生じたものであるという可能性を明らかにしうるにちがいない」(G.W.9: 160; S.E.13: 132; 著3: 257-58)。

そして、フロイトはのべる。「精神分析学から得られたトーテムの解釈を、トーテム饗宴の事実や人間社会

の原始状態に関するダーウィンの仮説などと考えあわせてみると、もっと深い理解の可能性が生ずる」(G.W.9: 171; S.E.13: 141; 著3: 265)。そして、フロイトがのべるのは、原始群において、男子たちが、原父を殺し、その肉を食べたという衝撃的な先史の物語である。

「ある日のこと、追放された兄弟たちが力をあわせ、父親を殺してその肉を食べてしまい、こうして父の群 (Vaterhorde) にピリオドをうつにいたった。[...] 暴力的な原父は、兄弟のだれにとっても羨望と恐怖をとまなう模範であった。そこで彼らは食ってしまうという行為によって、父との一体化をなしとげたのである。父の強さの一部をそれぞれがものにしたわけである。おそらく人類最初の祭事であるトーテム饗宴は、この記憶すべき犯罪行為の反復であり、記念祭なのであろう。そしてこの犯罪行為から社会組織、道徳的制約、宗教など多くのものが始まったのである」(G.W.9: 171-72; S.E.13: 141-42; 著3: 265)。

フロイトは、人類の過去には、現代の近親姦禁止の起源となる契機があらねばならないと考えた。「ある行為のために生じた罪意識が、数千年にわたって存続し、この行為について何ひとつ知るわけもない世代にあっても作用しつづける」(G.W.9: 190; S.E.13: 157; 著3: 278)。フロイトは1912年5月23日にユングに対してのべている。「リビドーの件につきましては、結局のところどの点でああなたのお考えが私見とは違っているのが解りました(もちろん近親姦についてですが、わたしはあなたの予告なさっているリビドー解釈の修正を念頭に置いています)。依然として理解できないのはあなたがなぜ従来の見解を放棄するのか、それに他にどんな近親姦禁止の起源や動機づけがあり得るのかといった点です」(316F, Brief. 562; Letters 507; 書簡下 297)。フロイトにおいては、神経症の病因が個体の過去に求められるのと同じように、人類における近親姦の禁止も、太古の時代にその起源が求められるものだったのである。

結語に代えて —〈精神分析的子ども〉の変容

本論では、フロイトに端を発した精神分析的思惟の対象となる〈子ども〉を〈精神分析的子ども〉と名づけ、その中で、個体の過去が人類の歴史への広がりや重ね合わせて論じられる子ども像を〈人類の先史としての

子ども)と呼び、フロイトとユングの論争から後者を探求してきた。

フロイトは、「文化への不満」(1930)において、精神を、古代以来の全ての建造物が残っているローマに比している(G.W.14: 427; S.E.21: 70; 著3: 436)。「すべての前段階が最終形態(Endgestaltung)と並んで存続するという現象は、心において(im Seelischen)のみ可能」なのであり、「人間の心理活動(Seelenleben)においては過去の存続(Erhaltung des Vergangenen)という現象が、唐突な例外というよりはむしろ原則である」(G.W.14: 429; S.E.21: 71; 著3: 437)。

こうした考えを今日の私たちが支持することは難しいことは、いうまでもない。私たちは記憶が——しばしば最近のものでさえ——書き換えられることを知っているし、ましてや、人類の先史の痕跡が今なお宿っているとは考えがたい。だが、少なくともフロイトにあっては、このような前提こそ、彼が「子どもの心」を問う理由だったのである。フロイトには個体の幼児期にせよ、類の過去にせよ、起源となる契機を求める姿勢があった。であるからこそ「精神分析はそもそもの初めから発達過程の追跡を目差していたのである」(「精神分析への関心」1913, G.W.8: 411; S.E.13: 183; 著10: 232-233)。

フロイトとユングの論争点であった、児童期経験の重要性は、1920年代から1940年代のアンナ・フロイトとM・クラインの大規模な論争(下司1999)にも受け継がれ、実際、後にクラインは、A・フロイトら精神分析の(正統的後継者)から(異端派の)ユングと比して非難されることになる(King et. al. 1991: 87, 333, 633)。

だが、フロイトーユング論争と、A・フロイトークライン論争には、外傷体験の(現実性/幻想性)という同様の主題を論じつつも、論の構成に大きな相違があることに着目せねばならない。フロイトーユング論争では、個体の過去たる児童期と、人類の進化における先史とが、パラレルに語られているのに対し、A・フロイトークライン論争では、子ども期はそれ自体として語られるのである。

A・フロイトとクラインの論争にみられる〈精神分析的子ども〉は、若干の古くさは否めないにせよ、そこで語られている理論を最近のものに置き換えるならば、今日なお解読可能であり、その意味で私たちに近い。それに対しフロイト/ユングの〈人類の先史としての子ども〉についていえば、私たちはもはや、その重要な構成要素である反復説を——少なくとも、眼

前の子どもの直接原始時代の傾向が見いだせるように直接的には——支持していない。いいかえれば、今日に至る、〈精神分析的子ども〉からは、〈人類の先史としての子ども〉という側面は失われてしまっている。その意味で、フロイト/ユングと私たちは、もはやある重要な地平を共有してはいないといえよう。

むろん、A・フロイトやクライン以後の〈精神分析的子ども〉の変容は、一方では児童理解の進歩を示すものといえる。しかしこの点を別の視点から見れば、フロイトやユングに比して私たちは、いわば、個体経験を基礎づけるメタ的な基盤——この場合は、進化論的な意味での歴史——を喪失しているとも考えられる。昨今のトラウマ論や児童虐待問題のように、私たちが個の幼児期を当然のように重要視する一因には、こうした思想史的な背景があるとも考えられるのである。

(指導教官 今井康雄助教授)

注

- 1)「先史」と対置されるのは本来であれば「子ども期」であろうが、本論は、〈人類の先史としての子ども〉というタームで、眼前の子どもへの視線がそのまま人類の過去へとつながっているような〈子ども〉のあり方を示したい。
- 2)この試みは同時に、心理学的分析によって創始者の「心」が分析されることで、まさに当該の心理学理論が主張しようとしている「心」の歴史的普遍性が主張されるという「心理学的循環」(下司2003: 192ff.)を抜け出る一つの道と考えられる。
- 3)「獲得形質の遺伝」をラマルキズムと呼ぶかダーウィニズムと呼ぶかに関しては、サロウェイとリトヴォの間でちょっとした論争がある。一般的用法に従ってこれをラマルキズムと呼び、フロイトを「心理ラマルキアン」と呼ぶサロウェイ(Sulloway 1992 [1979]: 274n30)に対し、リトヴォは「獲得形質の遺伝」という思想自体がダーウィンのうちに見いだせること、またフロイトが影響を受けたのは、ラマルクではなく「獲得形質の遺伝」という側面を含んだダーウィニズムであることから、フロイトはラマルキアンではなくダーウィニアンと呼ぶべきだとする(Ritvo 1990=1999)。
- 4)「リビドーの変容と象徴」(Jung 1991[1912])は、1950年に大幅に書き改められ大著「変容の象徴 —ある精神分裂病の前史の分析 (Symbole der Wandlung; Analyse des Vorspiels zu einer Schizophrenie)」(1952, G.W.5; C.W.5)となる。

文献表

フロイト、ユングの著作・書簡は、下記の省略記号(版巻:頁)で挙示する。

Freud, Sigmund G.W.=Gesammelte Werke: Chronologisch geordnet,

- Bd.17, London, Imago Publishing, 1940-52, Vol.18, Frankfurt am Mein, Fischer, 1968; S.E.=*The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, James Strachey (Ed.&Trans.), London, Hogarth Press, 1953-73; 著 = 高橋義孝他訳『フロイト著作集』人文書院, 1968-84
- Jung, Carl Gustav G.W.=*Gesammelte Werke von C. G. Jung*, Bd.19. Franz Riklin et al. (Hrsg.), Olten: Walter-Verlag, 1958-83; C.W.=*Collected Works of C. G. Jung*, Princeton, Princeton University Press, 1953-79
- ETG=Jung, Carl Gustav 1963 *Erinnerungen Traume Gedanken*, Aufgezeichnet und Herausgegeben von Aniela Jaffe, Zürich; Stuttgart: Rascher Verlag; MDR=*Memories, Dreams, Reflections*, Richard and Clara Winston (Trans.), New York, Vintage Books, 1989 (1st, New York: Rondon House, 1961); 自伝(1/2)=河合隼雄・藤縄昭, 出井淑子訳『ユング自伝 - 思い出・夢・思想(1)(2)』みすず書房, 1972/1973
- Brief.=McGuire, William und Wolfgang, Sauerlander (hrsg.) *Briefwechsel: Sigmund Freud / C. G. Jung*, herausgegeben von, Frankfurt am Main: S. Fischer, 1974; Letters=*The Freud / Jung Letters: the Correspondence between Sigmund Freud and C. G. Jung*, McGuire, William (ed.) Ralph Manheim and R. F. C. Hull (trans.), New Jersey: Princeton University Press, 1974; 書簡 = 平田武靖訳『フロイト/ユング往復書簡集(上下)』誠信書房, 1979/1987
- ※
- Ellenberger, Henri F. 1970 *The Discovery of the Unconscious: The History and Evolution of Dynamic Psychiatry*, New York, Basic Books. = 1980ab 木村敏, 中井久夫監訳『無意識の発見 —— 力動精神医学発達史(上下)』弘文堂
- Gould, Stephen Jay 1977 *Ontogeny and Phylogeny*, Cambridge, Harverd University Press. = 1987 渡辺政隆・仁木帝都訳『個体発生と系統発生』工作舎
- Haeckel, Ernst 1866 *Generelle Morphologie der Organismen: Allgemeine Entwicklungsgeschichte der Organismen*, Bd.2, Berlin, Geoge Reimer
- Jones, Ernest 1957 *The Life and Work of Sigmund Freud III*, New York, Basic Books
- Jung, Carl Gustav 1991 [1912] *Wandlungen und Symbole der Libido: Beiträge zur Entwicklungsgeschichte des Denkens*, Munchen, Deutscher Taschenbuch Verlag
- Jung, Carl Gustav 1913, "Versuch einer Darstellung der psychoanalytischen Theorie," in G. W.4: 107-255; "The Theory of Psychoanalysis," R. F. C. Hull (Trans.), in C.W.4: 83-226
- King, Pearl and Steiner, Recardo (eds.) 1991 *The Freud-Klein Controversies 1941-1945*, London, Routledge
- Noll, Richard 1997 *The Aryan Christ: the Secret Life of Carl Jung*, New York, Random House = 1999 老松克博訳『ユングという名の「神」 —— 秘められた生と教義』新曜社
- Ritvo, Lucille B. 1990 *Dawin's Influence on Freud*, New York, Vali-
- Blou Press = 1999 安田一郎訳『ダーウィンを読むフロイト —— 二つの科学の物語』青土社
- Sulloway, Frank J. 1992[1979] *Freud: Biologist of the Mind*, Cambridge & London, Harverd University Press, 2nd ed.
- 下司 晶 1999『アンナ・フロイトーメラニー・クライン論争 —— 精神分析の分岐点としての児童分析』『教育哲学研究』79: 93-109
- 下司 晶 2003『〈現実〉から〈幻想〉へ／精神分析から PTSD へ —— S・フロイト〈誘惑理論の放棄〉読解史の批判的検討』『近代教育フォーラム』12: 181-197
- 西平 直 1993『エリクソンの人間学』東京大学出版会
- 八杉龍一(編訳) 1994『ダーウィニズム論集』岩波書店
- 付記 本稿は文部科学省科学研究費補助金による研究成果の一部である。